傘のぶつかり合いに思う

酒井　幸子

遠足が流れた日に

今年東京はよく雨が降る。五歳児の遠足が土砂降りの雨で流れた日、朝、通勤途上で嫌な光景に出合った。駅から続く狭い路上を、幾つもの傘が行き交う。私の前を小学生の女児が二人並んで歩いている。真ん中を歩く二人がほぼ道路を占拠した形になっている。私も、追い抜くに追い抜けず、後ろから、仕方なく付いて歩く。しかし、向かい側から来る人は交差せざるを得ない。右側から女子高生らしき人、左側から中年男性が同時にやってきた。女児二人はまったく譲る気配がない。女児二人をはさむようにしてそのまますれ

違った。案の定、右側の女子高生と女児の傘がぶつかった。女子高生の方は傘を斜めにしたが、所詮狭い道、双方が心配りをしなければぶつかるのは目に見えていた。しかし、女児の傘は二人ともまっすぐのまま。不自然なほど微動だにしない。女児の真後ろからこの光景を見ていた私は、こんな時の身のこなしや人への心遣いをまったく知らない、いやしようとしないだけなのかもしれない女児に、当然のこと、情けなさを覚えた。しかし、次の瞬間、女児の放った言葉に情けなさを通り越し、すっかり重い気持ちにさせられてしまった。

「このくそばばあ！」

教育者として

女児は二人とも、身長から見て小学校二、三年生。すれ違った女子高生と思しき人もそう身長は高くない。それ故傘もぶつかる。私から見れば、双方とも、これからまだまだ未来に向かって伸び行く人たちである。

女子高生に、女児の放った言葉が聞こえたかどうかは分からない。私には振り返って確認する勇気もなかったが、少なくとも、女子高生からの罵声は聞こえなかった。それがせめてもの救いと私は思った。

傘のすれ違いから起きた何気ない一場面ではあるが、どうにも気が重くなった。小学校二、三年生といえば、ついこの間まで幼稚園に通っていた年齢である。直接かかわってはいないとしても、幼児教育に携わるものとして責任さえ感じてしまう。

何故気が重くなるのか、何故責任を感じる

のか、こんなことを自問自答しながら、雨の中をとぼとぼと園に向かった。

世の中にこのようなぎすぎすした光景は増えているように思う。通勤電車の乗り降りで、ドア付近に陣取って頑として動かず、乗る人降りる人に睨まれ、一触即発のムードになる光景も度々目にする。混雑した車内で床に置かれた荷物に足をとられ転倒しそうになったいらだたしい経験は多くの人にあるであろう。そして、このような光景の元凶を最近は若い人がつくっているケースが多くなったようにも思う。

さて、傘の件や最近の身近な出来事をただ憂いていては始まらない。幸いなことに、私は幼児教育に携わっている。この立場から発信し、心がけ、努力していけることは多々あるのである。先ずは足もと、自園の園児や保護者に、そして教師に、出来ることから始めようと気持ちを立て直した。

電車を乗り継いでの遠足で

世の中のマナーを守る、気持ちよく人と暮らす、およそこういったことは相手の立場や気持ちを理解することから始まる。

幼稚園で電車を乗り継ぎ遠足に出かけることが年に何回かある。この時、公共のルールや電車利用時のマナーなどについて、事前の指導や投げかけが有ると無いとでは、子どもたちの行動に大きな違いが出る。この事前指導の有るか無いかで、責任者として引率する中で、何度か苦い経験を味わったことがある。

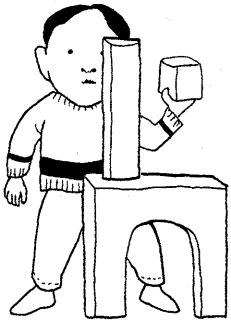
ある園で、地下鉄三線を乗り継いで出かけた時のこと。私は顔が真っ赤になり通しだった。ホームでは、ドア毎に分かれて乗れるよう、ホームの幅いっぱいに並ばせ、一般の方の通路をふさいでしまった。混んだ車内では、ブレーキがかかる度に「キャーッ」、子どもたちの奇声が響いた。駅のトイレでは、待つ場所を考えず子どもたちを通路をふさぐ形で溜まらせ「何考えてるんだ、これじゃ俺たちが通れないじゃないか」と初老の男性から大きなお叱りを受けた。一駅しか乗らない車内で、席を探して座らせる教師と我慢させる教師とがいて子どもたちに不満を抱かせた。

何十人もの子どもたちを安全に引率せねばならない身にしてみれば他の乗客に思いを馳せる余裕が無かった、というのは言い訳だと思う。勿論責任者としての私も言い訳は通用しない。

遠足挙行後の反省でこのことを徹底して話し合った。

ある教師は、迷惑をかけていたそのことにすら気付いていなかった。ある教師は、席を探して子どもを座らせるのは当然で、立たせておくということを考えてもみなかったと言った。そしてある教師は、私同様、ずっと赤面する想いでいたと述べた。

教師ですらこのような状況である。子ども



たちがこちらからの働きかけ無しで自主的に望ましい行動が取れる訳は無い。

自然公園、動物園、遊園地……、園外に出ての活動にはそれなりの目的がある。豊かな自然に触れる、様々な動物や植物に興味や関心をもつ、遊園地の乗り物に乗り友達と一緒に十分楽しむ、広い場所で体を思いきり動かす等々。そしてその体験をごっこや絵画製作、リズム表現等、後の活動につなげていくこともあるであろう。

一方で、集団での行動の仕方を知る、公共の場でのルールやマナーを守るといったことも、園外に出かけてこそ身に付く大切な目的となり得る。

教師がこのことを肝に銘じた時、少なくとも子どもたちの行動は見事に変わる。

こういったことを通して、子どもたちに、自分以外の他者の存在、自分と相手との違い、相手の気持ちに思いを馳せること、相手への共感、自分を大切に思うこと、相手を受け入れること等、人間としての豊かさを培っていくのだとも思う。

共通の情緒をもつ

「常識とは共通の情緒である」とどなたかが書かれたことを目にしたことがある。最近はこの情緒が実に多様になった。極めつけは「恥ずかしさ」に対するものであろうか。今ここで、それを論じるつもりは無い。しかしこれだけは言える。人として、社会で生活をしていく以上、その地域の多くの人が気持ちよく過ごすために、共通の情緒をもつこと、即ち常識は必要であること。

世相を映す

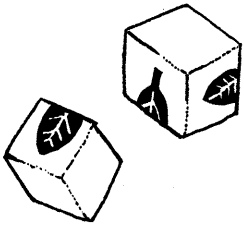
そしてもう一つ、「自分は正義、悪いのはあなた」、傘の女児からは無言のこんな思いが感じられた。

身勝手とも思えるこんな光景は、実は、今世間のあちらこちらで展開されている。教育の現場も例外ではない。子ども同士のトラブルで、相談に見える保護者の多くが、自分の子どもは悪くない、相手に非があると訴える。都合の悪いことはすべて人に責任転嫁する。傘の女児はこんな世相を見事に映し出した。私にはそんな風に思えてならない。

そしてハッとする。知らないうちに自分自身も、世の中のせい、保護者のせい、担任教師たちのせいにしてはいまいか。

明日も雨降り

テレビが天気予報を伝えている。今晩、明日の明け方、午前中と、細かく区切って、降雨の確率を伝えている。どうも明日は一日雨降りらしい。

また同じ光景に出合ったなら、私は言えるであろうか。「並んでいると邪魔になるわよ。ちょっと除けてね」と。

（小日向台町幼稚園）